

## ポーズ・ファイラーから見た女性の話し方の変化と現状

れいのるず秋葉かつえ

- \* 「立ち向かうことば」を遮断するものは何か。
- \* ポーズ・ファイラーの性差はどこからくるか。
- \* 守備型の「大臣ことば」にも変化のきざし？
- \* 田中眞紀子外相の答弁は攻撃的で母音ファイラーがない。
- \* 一人一人の言語生活が「立ち向かうことば」を拓く。

——ある意味では「立ち向かうことば」から遮断されていた女たちが、真にことばの存在意義を裏付ける行動の中で、自主的にみずからのことばを作りだしてゆく時、ことばは光りかがやく。

壽岳章子（一九七八）

フェミニズム第二の波の第一世代が、新しい時代とともにあることの感動の中で、言語を通して人間としてのアイデンティティを確立していく可能性を謳った論文の一節である。それから二〇年余り、私たちの「立ち向かうことば」を遮断してきた仕組みは、予想以上に巧妙で頑強、文化全体に及んでいて力づくでは崩れそうもない。このエッセイでは、「自然談話」を手がかりに、性差との関連で十分に研究されているとは言えないポーズ・ファイラー（以下「ファイラー」と言う）に焦点をあてる。

日本語は、欧米言語にはない排除的性差の形式（女、あるいは、男しか使えないという形での性差）がある点でユニークであるが、傾向的性差（女、あるいは、男のほうが多く使う傾向のあるという形での性差）のほうが実際は圧倒的に多い。ファイラーは、性差が傾向的なものとして減少する主な領域の一つである。日本語は、ファイラーの種類がきわめて豊富で、しかも、多くの言語場面で実に頻繁に使われる。一見些末なように見えるファイラーを詳細に点検すると、「男の言語Ⅱ公的、女の言語Ⅱ私的」という言語における役割分担の構図が見え隠れする。しかし、ファイラーにおけるこの性差は、傾向的なものでしかないからこそ、そこでの境界崩しは容易でもある。それを逆手にとって眼に見えない差別的偏見を無効にしていくこともできる。女性の社会進出が進み、世界中の文化が再編成に向かう転換期の混乱の中、女たちがみずからのことばを作りだしていく可能性をファイラーを中心に探ってみてみる。

## 1 ポーズ・ファイラーと性差の研究

ファイラーとは何かを考える前に、まず、ファイラーの典型的な例を二つ見ておこう。

現象

〔例1〕それからアノー第二番目にマスコミの内容についてアノー出てきたことはアノーしかしそのなかでもアノー流動化の兆しが見られるということなんですが……

〔例2〕ただマーこれをオー年金制度でエやるか、あるいはアもつとオー別の対策のなかでエーいわゆる……

どちらも、かなり大きな聴衆を前にしたスピーチであるが、〔例1〕は四〇代初めの大学教授の女性、〔例2〕は同年代の厚生労働省役人の男性が話している。似たような場面であるのに、女性のスピーチには「アノー」「アノ」が多発し、男性のスピーチには、母音ファイラーが多い（母音ファイラーは、一旦呼気をとめ、先行音節の母音と同じ母音をいろいろな長さで再生するもので、場合によっては、全く同じ母音の繰り返しではなく、中間のエ音に置き換えられることもある）。

ファイラーは、実は、どの言語にも大なり小なりは見られる普遍的な現象で、英語のファイラーの研究も一九七〇年代初めから行われているし、パン（一九八三）など、日本でもいくつかの注目すべき研究がある。<sup>1</sup> 日本語の実際の言語データを分析しようとすれば、必ずファイラーに出会うし、それぞれのファイラーが発信する社会言語学的意味を考えないわけにはいかない。ファイラーの定義はなかなかむずかしい。ファイラーの機能が主にデイスコースにかかわるもので、多義的多機能的であるため、どの機能にそって定義しても洩れてしまう部分があるからである。ここでは、「統語論的構造からはみだした形式」「空白を埋める働きをするもの」という観点から取り出し、「語彙ファイラー」（あるいは程度語彙的な意味を持っているもの）と「音韻ファイラー」（意味のない音で空白を埋めているもの）に分けて観察する。両者の境界はあいまいであるが、これから見ていく「やっぱり」「まー」「なんか」「あの一」

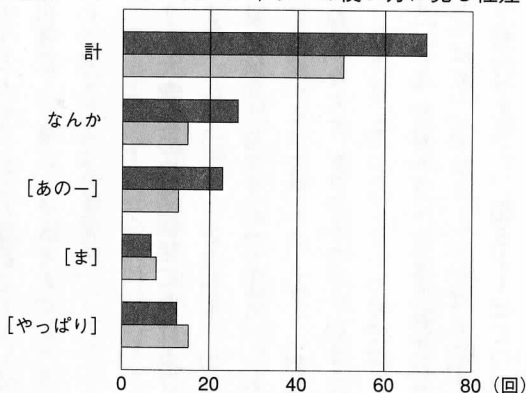
の系統は語彙ファイラー、母音ファイラーは音韻ファイラーと考えておく。これまでの研究では、「やっぱり」「まー」と母音ファイラーは男性が多く使う傾向があるとされ、「なんか」「あのー」系統は女性が多用するということが指摘されている。大学生たちの自然談話データによってファイラーにおける性差を再確認し、更に、それぞれのファイラーがどのようにして女の立ち向かうことばを遮断する働きをするのか考えてみようと思う。

## 2 大学生の自然談話におけるファイラー

まず、江原由美子・好井裕明・山崎敬一（一九八九）の共同研究のデータを使って行ったファイラーの量的研究の結果を紹介しよう。<sup>2)</sup> 一対一の三〇分会話二セット（一〇・五時間）をローマ字入力してデータベースを作った。パン（前述）でファイラーとして分類されている沈黙、あいづち、「そうですね」「なんていうのかなー」のような文構造を持ったものは、ここではファイラーとしない。母音ファイラーは、まったくないわけではないが、この種の会話ではほとんど使われていない。「なんか」、「まー」あるいは「まー」（まとめて「ま」とする）、「あのー」「あのー」（まとめて「あのー」とする）、「やっぱり」「やはり」「やっぱし」「やっぱ」（まとめて「やっぱり」とする）の四種類の語彙ファイラーが圧倒的であった。図8-1はこの四種類を女性、男性一人一人が一五分間（三〇分会話の二分の一）に平均どのくらいの頻度でファイラーを使っているかを見たものである。

「なんか」「あのー」「ま」「やっぱり」のトータルで見ると、女性は、男性よりも多くファイラーを使っている。さらに、女性が多く使うファイラーと男性が多く使うファイラーの違いがある。「なんか」

図8-1 ポーズ・フィラーの使い方に見る性差



	[やっぱり]	[ま]	[あの一]	なんか	計
■女性	13.90	4.57	21.67	27.62	67.76回
■男性	15.76	5.67	14.29	16.14	51.86回

と「あの一」は「女性的」であり、「ま」と「やっぱり」は「男性的」である。大学生データの場合同じ年代の未知の学生同士という、日本社会のジェンダー関係の中ではきわめて対等な人間関係の中での会話であり、話し手たちが特に「男らしさ」、「女らしさ」を要求されているとも思われないから、ここに見られる性差は、文化的要請にもとづくかなり一般的な性差だと見ていいだろう。

なぜ女性が「なんか」「あの一」を多く使う傾向にあるのだろうか。なぜ男性は「ま」「やっぱり」を多く使うのだろうか。最近のディスコース理論と重ね合わせると、フィラーが私たちの「立ち向かうことば」を遮断する装置として効果的に機能するものであることがかいま見えてくる。

### 3 フィラー・ポリティックス

「やっぱり」は、日本文化の独特な世界観に関与していて、「やっぱり」を含む口語文を英訳しようとすると、すぐにはびったりした訳語が見つからない。和英辞書では、*too; as well; like the rest; all the same; after all; notwithstanding* などがあげられている。これらの英語表現は、それぞれに言外の意味を前提しているが、日本語の「やっぱり」の意味を捉え切れてはいない。「やっぱり」の意味内容がきわめて日本的なものだからであろう。ポストモダン・マルキシスト社会学者ローズマリー・ヘネシー（一九九三）が、覇権とは、支配者が文化の常識、つまり、論ずるまでもない当然の価値観や信念を作り上げることによって支配を行うプロセスである、というグラムシの考察を引用している<sup>3</sup>。この考え方によれば、「やっぱり」はへ私やあなたを含む世界Ⅱ世間Ⅱ日本社会の常識から言えばネーという注釈をデイスコースに挿入することによって、自分個人の考えを文化的真理として押し通してしまう仕掛けになっていると解釈できる。文化人類学者たちが指摘しているように、「世間」「世間の眼」は日本人独特のこだわりを反映する概念で、世間の眼を日本人ほど気にしないアメリカ人の英語にはこれに対応する語がない。「女の幸せはやっぱり結婚だよ」というよく聞く表現の持つ押し付けがましさは、目に見えない「世間」を笠に着たもの言いなのであるが、友だち同士、同僚同士、家庭や職場の小さな上下関係の中で何気なしに使われてしまうために覇権性が見えにくくなっている。心のどこかではへ冗談じゃないよ、なにが「やっぱり」なんだよ〜と思うことがあっても、一般にはなんとなく納得させられるか、聞き流してしまう。もちろん、「やっぱり」の一つ一つが意図的な遮断装置になっているわけではない。多くの場合、ほとんど意味のない単なる空白補充語として使われて

summational  
- said p. 255

いる。しかし、その根は無意識の中の「日本文化のコンセンサス」に繋がっているものだから、注意が必要である。

へ覇権は上から下に向かって一方的に作用するだけで、上と下のことは交しあいの中で取り引きされているものである」というグラムシの覇権論は、フーコーのレジスタンスのディスコース論に通じるもので、一九八〇年代後半以降の言語と性差研究に重要な刺激を与えている。「やっぱり」の覇権性を明確に認識しておけば、「女の幸せはやっぱり結婚だよ」という伝統的な常識に対して「やっぱり女は自立しなくちゃね」と立ち向かうことができるだろう。

「ま」についても、和英辞書からヒントを引き出してみよう。第一に、just: pleaseなどの垣根表現的な意味が表示され、次に、「躊躇」としてある。しかし、「まあ、私のいうことをききたまえ」「~~私~~は、まあ学者の方だろう」「まあ、歩いて行くことにしよう」のような例文が示唆しているように、「ま」には垣根表現としては奇妙なニュアンスがある。垣根表現 (hedging) というのは、一般に主張を和らげるためのもので理解され、女性に多用されると言われているが、「ま」は、主張を和らげるためだけのものではない。話し手が相手をさえぎって自分の意図する方向に会話の方向を持っていることとするような時に現われることが多く、男性のほうがよく使う。

ちなみに、パン (前述) でも、「ま」は男性的なファイラーと結論づけられている。日本語の話しこ とばに特徴的に現れる「やっぱり」と「ま」の機能は、欧米の言語研究者が考え出した「垣根表現」という大ざっぱな括り方では捉えられない。巧妙に相手を遮断し、ディスコースを支配する装置として利用できるものなのである。

女性がより多く使っている「なんか」については、最近さまざまにディスコース理論を応用した修士論文や博士論文で大きくとりあげるものが増えているが、「なんか」が話し手側の躊躇の気持ち、発言内容の真偽についての不確かさ、曖昧さを表現するフィラーだという点でおおむね一致している。特に性差にフォーカスした量的な研究はないが、サンプルを一覧とする女性の発話例が圧倒的に多い。ディスコース支配に都合のいい「やっぱり」と「ま」が「男性的な」フィラーで、自己主張を和らげるフィラーである「なんか」と「あのー」が「女性的な」フィラーだということは、日本語における性差の一般的原則から見ても、意外ではない。

#### 4 母音フィラーとレジスター

母音フィラーは、順番取りが頻繁に起こらない類のディスコース・ジャンル——講義、講演、座談、ニュース解説、討論会——の特徴である。一人の話し手にある程度の長さのターンが割り当てられていて、相手があいづちをいれたり、割り込んだりすることがないようあらかじめ制御されているジャンルに出現する。話し手は、話者交代についての気配りをしなくてもいいが、そのかわり、自分に割り当てられた長いターンを流暢に維持する責任がある。したがって、何をどう表現するかを考える「時間かせぎ」が必要になる。フィラーの基本的な機能の一つはディスコースを進める上での「時間かせぎ」である。母音フィラーは、相手にあまり気付かれずに「時間かせぎ」をするのに都合がいい。「あのー」にも「時間かせぎ」の機能はあるが、二音節の長さを持ち、語彙的な意味をとまなうことから、あまり頻繁に使うと内容理解に支障をきたす。母音フィラーと「あのー」の認知上の違いにつ

いて予備調査をしたが、被検者の一人は「例1」について「何これ？ アノー、アノーばかりで何言ってるかわかんない」というコメントした。このことは、男性は母音ファイラーを使い、女性は「あのー」を使うと傾向的性差がどういふ心理を反映するものであるかを理解する手がかりになる。「時間かせぎ」は、思考の曖昧さや躊躇ともつながり、「男らしさ」を損ねるから、男にとつてはマイナスなのである。一方、女にとつては、躊躇や曖昧さが「女らしさ」としてプラスになることが多い。だから、公の場でスピーチをすることの多い男たちにとつて、母音ファイラーの習得は重要な意味を持つのであろう。

## 5 ファイラーと女性の社会進出

一九八〇年代に入つて、女のことばは共感的だ、相互支持的だとして、女ことばの価値を見直す議論が支持された。しかし、女性の社会進出が進めば、女性は短時間内で多量の情報を明確に——あるいは、明確だという印象をあたえるように——伝達する言語使用能力が不可欠な場面にも遭遇する。母音ファイラーは、そういう目的では非常に有効であり、社会的公的場面で発達するいろいろなレジスターの特徴の一つとなつている。大勢の聴衆を前にした講演、スタジオのキャスターの呼び出しに応じて世界各地の状況を伝える「生中継」レポーターのスピーチ、国会における「大臣のことば」「官僚のことば」は、その最たるものであろう。「例3」は、一九九三年当時の細川首相のスピーチの一部である。

〔例3〕 誰でもオー政治に参加するウー機会がアーもてるようなエー—そうゆうシステムつてゆ

うものをお試みていくことが私たちのオー政治イ運動のエー大きな一つのオー目標であると  
 ……

日本の国会討論は、伝統的には、野党議員が与党を攻撃し、大臣は政策を弁護するという形をとってきた。大臣ことばは、守備のことば、大臣は「時間かせぎ」をしながら慎重にディスコースを進めるものという暗黙の諒解があつた。大臣たちの長めの母音ファイラーは、野党の攻撃をかわす盾のようなものだった。大平元首相は、特に長いファイラーを頻繁に使うことでしられた。ファイラーをあまり使わない大臣もまれではない。たとえば、村山元首相は、ファイラーをほとんど使わないで、相手を引きこむ要素である「ね」を多用するのが個性であつたし、首相になつてからでもファイラーを多用する場面は限られていた。橋本元首相も母音ファイラーをほとんど使わない。一つ一つの音節をていねいに時間をかけて発音し、一般にファイラーとは考えられない「そして」などを巧みに挿入するなどして時間をかせぐ。強調イントネーションもなく、平板な印象を与える。だから、ファイラーがなくても、従来  
 の守備型スピーチであることに変わりない。ファイラーを基本にした慎重スピーチは、大臣に代わつて  
 答弁させられる時の官僚のスピーチにもっとも典型的に観察されるというべきかもしれない。官僚は  
 大臣以上に慎重でなければならぬ立場にたたされる。

守備的スピーチの伝統から大胆に逸脱したのが小泉首相である。小泉首相は守備一点ばりではなく、  
 しばしば攻撃にでる。母音ファイラーがほとんどない。無声のポーズがあり、強調イントネーションも  
 多い。野党議員の専用だった修辭疑問文形を使って相手にぶつかつていたりもする。その意外な攻  
 撃姿勢に野党議員が腰くだけになる場面もある。

母音ファイラーが「大臣ことば」の象徴だった時代は、女性大臣がほとんどいなかった時代でもあった。だから、小泉内閣の五人の女性大臣がどんなスピーチで大臣としての役割にチャレンジしていくか、興味深い。長い官僚経験を持つ女性大臣は、当然ファイラー使いがうまい。一方、田中眞紀子大臣の発言は、その内容もさることながら、スピーチそのものが従来の守備型とは違う。母音ファイラーがほとんどない。「あー」は使うが、気になるほど頻繁ではなく、ぼかし表現が少ないから、発話行為意図が明確で、時には攻撃的に響く。扇景国土交通相のスピーチにも母音ファイラーがない。攻撃的ではないが守備的でもない。

民主的なディベートの伝統がない日本の国会のディスコースは、これからどう変わっていくだろうか。既成の「大臣ことば」からはみだした女性大臣のことばは、古いコミュニケーション体制を揺さぶる力になるだろうか。今、国会中継が言語研究者にとってもおもしろくなってきている。

## 6 光かがやくことばをもとめて

数世紀前には印刷技術が人類のコミュニケーションに革命的な変化を引き起こした。今また情報通信テクノロジーによって、あるいは、文化の世界化によって、コミュニケーション秩序に新たな方向転換が起こっている。日本ではディベートの仕方を学校教育で学ばせる必要がある」という声があがっている一方で、アメリカでは日本その他のアジアの国々のように和を強調した言語文化から学ぶべきである」という提案がなされている。欧米の議論言語がいいのか、アジアの和の言語がいいのか、ディスコースの状況によりテーマによって判断されなければならないことは言うまでもない。

しかし、文化の世界化が急速に着実に進行している今、世界は言語習慣を調整する必要に迫られている。ここで指摘した「大臣ことば」における変化の兆しは、新しいコミュニケーション秩序に向かう転換期特有の揺れであり、日本語の将来の行方を示唆している。ジェンダーの再編成もそうして世界中の文化が変化していく過程で徐々に進んでいくものであり、「女ことば」が今あるような形の「男ことば」と同じになればいいというようなものではない。確かなことは、一人一人の日常の言語生活だけが「立ち向かうことば」を拓いていく場所なのだということである。言語と性差の研究は、日本文化全体を視野にいれつつ、現在進行中の変化に目を向け、したたかにポリティカルに、未来学的でありたいと思う。光かがやくことばをもとめて。

## 〔注〕

- (1) F・C・パン(一九八三)は、数人の研究者が共同で執筆したもので、第七章の「空白補充語」は井出祥子が担当したと説明されている。
- (2) 快くデータ使用を許可してくれた江原グループに心から感謝している。もともと記録された会話は三二セットあったが、譲渡途中で紛失したものもあり、女と男の数そろえのために二一セットを選び、ローマ字入力してデータベースを作らせてもらった。
- (3) Antonio Gramsci(一八九一—一九三七)は、イタリアのマルキシスト活動家・理論家で、「覇権」について有益な分析を行っている。カルチュラル・スタディーズという現代の批判的文化研究の流れの中で文化のさまざまな形を分析するのに役だっている。

【参考文献】

- \* Hennessy, Rosemary. 1993, *Materialist Feminism and the Politics of Discourse*, New York/London: Routledge.